

# 兵庫県現代詩協会 会報 41号

2017年7月1日発行 たかとう匡子

## ◇第二十一回定期総会報告

兵庫県現代詩協会第二十一回総会が五月七日(日) 13時30分からラッセホール・バイオレットの間で行われた。

第一部の司会は玉井洋子常任理事。たかとう匡子会長の挨拶に続き、議長として、理事の梅村光明氏が選出された。今回の参加者は38名、委任状67通で会員数の過半数を超えていることから、今総会は成立すると議長が告げた。議事進行は、2016年度活動報告を神田さよ事務局長が、2016年度決算報告を野口幸雄会計担当が報告、会計監査報告は渡辺信雄監事が報告し、会場の拍手で承認された。また、2016年度役員選挙による各役員案が神田事務局長から紹介され、承認された。(新役員は別欄にて)

次に2017年度活動報告案を神田さよ事務局長が、2017年度予算案を野口幸雄会計担当が述べ、これらも拍手を持って承認された。これをもって議長は退任。その後大橋愛由等常任理事より、アンソロジー巻末年表の訂正があれば申し出をお願いする、また、この年表はネットに掲載されているのでご覧くださいとアナウンスがあり、休憩に入った。

第二部は、14時45分よりの講演会で始まった。会員の和比古氏(新常任理事)が、「私の科学と詩の歩み」について講演をした。文学以外の分野の話に会場の参加者は興味深く聞き入った。(講演要旨は別頁)

第三部は15時45分より自作詩朗読。朗読者は、青木左知子、阿部由子、田中信爾、中嶋康雄、野口幸

雄の各氏。飛び入りで江口節、内田正美両氏が加わり、それぞれの個性が光る朗読だった。

その後、時里二郎副会長が閉会の挨拶をした。最近では会員数が減少しているが、会員の詩集などの出版物は5カ月で10冊以上となっていて活力を感じる。一人一人が詩に向き合う力を発揮していけば、会員数減少は、あまり問題ではないのではないか、と述べた。

総会のプログラムは全て終わり、三ノ宮「たちばな」にて、懇親会を行った。参加者数は少なかったが親密度の高い楽しい集まりとなった。

総会参加者・青木左知子、飛鳥井れん、阿部由子、猪谷美知子、内田正美、梅村光明、大西隆志、大橋愛由等、尾崎美紀、井之上幸代、江口節、植村孝、和比古、神尾和寿、香山雅代、神田さよ、北野和博、小西民子、季村敏夫、佐藤勝太、関はるみ、高谷和幸、たかとう匡子、田中信爾、玉川侑香、時里二郎、内藤富美代、中嶋康雄、野口幸雄、玉井洋子、谷田寿郎、松下玲子、丸田礼子、宮川守、山本真弓、横山美代子、由良佐知子、渡辺信雄、以上38名。

懇親会出席者・青木左知子、大西隆志、大橋愛由等、植村孝、和比古、神田さよ、北野和博、佐藤勝太、たかとう匡子、高谷和幸、田中信爾、時里二郎、中嶋康雄、野口幸雄、横山美代子、以上15名。

### 2017年度からの新役員

会長 たかとう匡子

副会長 時里二郎

事務局長 神田さよ

会計 野口幸雄  
 常任理事 大橋愛由等、大西隆志、尾崎美紀、和比古、北野和博、神尾和寿、玉川侑香、丸田礼子  
 理事 玉井洋子、渡辺信雄  
 監事 梅村光明、高谷和幸

### 2017年度の活動計画

- ・総会
- ・ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご
- ・ポエム&アート(仮称)
- ・読書会
- ・文学紀行
- ・会報発行 年2回 7月、12月
- ・名簿発行
- ・ホームページ更新

(報告・神田 さよ)



第21回定期総会・ラッセホール・バイオレット たかとう会長挨拶

## 総会 第2部 講師・和比古 演題 『私の科学と詩の歩み』

### 講演趣旨

文学や美術などの芸術と科学は両立するものであるか、また共通点はあるのか、私なりの見解について話したい。科学の世界の化学者である私が如何に詩と絵に魅せられてきたかについても述べたい。地震学者で随筆家である島村英紀氏によれば、科学者と詩人には共通点があるという。共に世間知らずの「孤独な戦士」であると指摘されている。しかし、彼によれば、この点が創造のための必要条件である。同じ次元とは言わないまでも、よく似た一面をもっている。さらに、化学者であるFohrman教授は、有機化合物の合成は発見と創造に基づいたアートであると見なしている。Fohrman氏は詩論を展開するとき、化学における触媒機能との共通点に言及している。

大学に入学後、化学以外でも創造的なこと、特に美への挑戦がしてみたくなった。カンディンスキー、クレー、ムンク達の絵を見るとともに、萩原朔太郎、中原中也、立原道造等の詩を読んだものである。インスピレーションとして感じる美を表現したい衝動に駆られ、詩と絵の世界に入ってしまった。刹那的心象風景を書きとめることにより、自らの感性を高めようとした。絵も独学であるが、描き始めた。

さて、化学は幅広い研究分野からなっている。燃料電池、太陽電池のように将来性のあるエネルギー源、炭素繊維に代表される新素材、医薬や人工臓器のような再生医療でも必須の学問であるとともに、環境保全の観点からも重要である。また、情報テクノロジーでも最先端の技術を可能にしている。これまで日本の化学者は大きな貢献をし、数名がノーベル化学賞を受賞している。

私の研究の基礎になる原理は電子移動の制御に基づいており、機能も美しいことが必要である。そのためには生体体系を規範とする反応を開発、システムを設計

ナノ空間を構築しなければならない。まず、カップリング反応に関し、炭素—リン結合形成のための新触媒反応（平尾反応）を開発した。美しい反応様式と高い評価を受けている。さらに、未開拓のカップリング反応として、求核種同士の求電子種同士の選択的な交差カップリングをバナジウム化合物のレドックス機能を巧みに活用することで達成した。

電子が流れる導電性高分子と金属をハイブリッド化し、従来にはない機能性触媒や電子材料を可能にした。一方、平面パイ共役系であるベンゼンは発がん性であるが、それが無限大に平面で広がったのがノーベル賞のテーマとなったグラフェンである。他方、非平面の化合物の代表としてフラレンが挙げられる。カーボンナノチューブも知られている。第3のキーマテリアルズとしてフラレンの部分骨格でポウル状化合物のスマネンやコラニレンがある。スマネンは未知物質であったが、2003年に我々の研究室が世界で初めて、しかもエレガントなプロセスで合成することに成功した（サイエンス誌掲載）。美しい構造をしているので、有機化学美術館で紹介されている。ポウル反転することも明らかにした。結晶は半導体であり、金属とのハイブリッド化では非平面パイ—金属共役系が構築された。

このようなシステム形成に加えて、生体分子と金属をハイブリッド化した生物有機金属化合物を設計合成し、生体系のような空間を構築することに成功した。新分野であるこの生物有機金属化学の研究において、国際的にリーダーシップをとった。

これまで化学に夢をもって新しい研究領域に挑戦してきた。化学の世界でも美的、詩的センスが必須であったと考えられる。脳をいろいろな分野で可能な限り機能させることにより、よりよいアイデアが生まれてきたと思われる。美を追求して、新たな研究を展開した結果である。このように構造や機能が美しい分子システムを化学の世界で創製しながら、研究生活を送ってきた。以上の成果を総括した本と、諸外国の友人の

結果を含め系統的にまとめた本にそれぞれ集大成した。自然の中における小さな人間の活動の評価は「視点」によって様々であるが、その人が力の及ぶ限り「精進」して得られる「達成感」に価値があるのではないかと思われる。

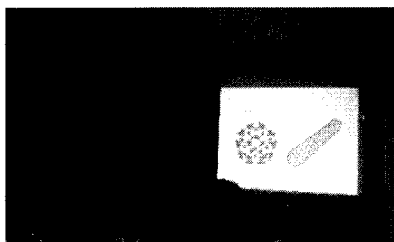
詩と絵に関しては、パステル画とコラボレーションした第一詩集「構図のあるバード」を出版した。さらに、「風の構図」、「道化の構図」、「擬人の構図」も出版した。これらの詩集では各詩に絵を付している。ジャズやクラシック音楽が響く部屋で、化学専門書と詩集が同じ本棚に並んでいるのに違和感はない。

（和比古）

### 講師略歴

平尾俊一（本名：ひらおとしかず）、京都大学大学院博士課程修了、工学博士、大阪大学工学部助手・助教、教授を経て現任名誉教授・特任教授、大阪大学理工学図書館長、日本化学会副会長、国際生物有機金属化学賞、国際バナデイス賞

※パソコン、プロジェクターを使い、スクリーン・図等を用いた化学を分かりやすく解説された。



## ◇第十一回読書会

「安西冬衛」を読む―蝶は本当に海峽を渡ったのか

二〇一六年十一月二十六日 私学会館  
チューター 北野 和博

秋日和にかかわらず集う者が多いのは「安西冬衛」という謎の詩人に惹かれてのことだろう。出席者34名。

―てふてふが一匹韃靼海峽を渡つていった。「春」の詩人という知識のみで参加したが、当日、北野氏が用意された24頁にわたる資料に驚いた。詩集はすべて廃版になっていることからの配慮である。まず年譜から辿る。明治三十一年奈良に生れる。十三

歳の大坂府立堺中学校時代はボート、水泳の選手として活躍。父から漢籍を与えられ愛読。十八歳より俳句を「ホトトギス」に投稿。二十一歳、父のいる大連に移る。後の詩作に大きな影響を与える。二十三歳、満鉄に入社。後膝関節疾患で右足切断手術。二十五歳頃より詩作をはじめ翌年、詩誌「亜」を滝口武士と創刊。三十一歳、第一詩集『軍艦茉莉』刊行。三十六歳で帰国後も小説、随筆など旺盛な文学活動。六十七歳で永眠。

作品の読み解きに移る。「軍艦茉莉」の妹は主人公にとっての理想の女性像として読める。「誕生日」「再び誕生日」の（誕生日）は独立のメタファー。「春」の二篇はセツトで見開きに掲げられた。続く短詩数編にも「淮南子（えなんじ）」などの博識が散りばめてあったり、性的メタファーが隠されていたりと、表と裏の読みができる。

「土耳其」

新月は燦んだ。橋によじ登つた男は郵便切手に秘蔵（しま）はれた。湾はうつすらと暮霞の底に象嵌されてゐた。

トルコの国旗を連想するとみごとな写生詩というイメージの詩人である。

散文詩「菊」「地球儀」では架空の妹への願望をはばからず書きぬける勇氣。（お兄様、お兄様、曇つた日でも夜になれば一緒）という言葉は余韻を残す。

一九四七年詩集『韃靼海峽と蝶』を出す。その三年前の『大学の留守』にも同じタイトルの作品がある。これほどまで原点ともいえる「春」を強調するのは、より深く読み取ってほしいということか。

「すると一匹の蝶がきて静に銃口を覆うた。」（韃靼海峽と蝶）「すると、妹の優しい骨盤―石灰質の蝶が苦（さ）えてくるのであつた」（随ちた蝶）

蝶とは何の代名詞なのか。性的高まりを知的に表しているとも。

北野氏はシネマに詳しい。蝶の詩はモニタージュの手法を取り入れていると、最後に映像を披露する。シニールリアリズム第一号の映画「アンダルシアの犬」（サルバドル・ダリ作、主演）と「戦艦ポチョムキン」（1915年）の一部分。オデッサの階段での人民の流れと、人物大写しのモニタージュは衝撃である。諸先輩から評判を聞いていたので、よい機会であった。安西冬衛は、当時流行していたシニールリアリズムの情報を得ていたのではないか。

これまで、「てふてふ」の柔らかく、いたいけなものが「韃靼海峽」という荒波を渡る、孤独のイメージが強烈だった。たとえ春、壁に貼られた地図の上に、蝶が留まつたのを目にしたとしても、それを詩に昇華させるには、工夫と衝動があつた。「間宮」から「韃靼」に置き換えをひらめいたのは偶然ではなく、日頃の詩的言語、文字、音に対する冬衛の鋭い感性からに違いない。今回の読書会で、心底にある動機の一部にまで触れ、ますます謎の詩人になった。

（由良 佐知子）

## ◇第九回読書会

「草野心平の詩について」

二〇一六年二月二十日 私学会館  
チューター 高谷 和幸

五か月の余裕があつたのに、草野心平を調べてみると、思ったより大変だったと笑いを取つたあと、「草野心平の魅力」ということで、高谷氏がどう語るか、に興味をもつた。難解な詩を書いているといわれる高谷氏ではあるが、美術へのこだわりと洞察力は、詩の構成に大きな意味をもっている。草野心平は色彩の豊かな詩人でもあり、美術家との関係など高谷氏ともある意味で共通項があり、親しみのある詩人だとは思つた。「蛙の詩人」と呼ばれ、教科書にも載っている国民的な詩人のイメージもあるが、評価のむつかしい詩人でもあるとの中野重治の批評から、「評価のむつかしさは草野詩の遠心性、衝動性を挙げながらその複雑な性質に起因する」を取り上げ、草野の大陸への渡航の話などが語られた。高谷氏にとって、詩人としての矜持に満ちた草野のエピソードは強く興味を惹くものだったようだ。

大正十二年徴兵検査のため広州から帰国、長崎の本屋で「詩聖」に自分の詩が入選、その誌に偶然に村山槐多の詩が掲載されて大きな感銘を受け、平市の柴田書店で新刊の『槐多の歌へる』と出会う。そして、大正十四年に高村光太郎のアトリエで槐多の絵に会う。その後五〇年たつて初めて草野は村山槐多の本を上梓した。草野にとって槐多理解は五十年間の草野自身の「技術論（詩論）」でもあつたと言える。

かつての技術論も詩がエスプリをもつた物体と考えば、そこには主義や観念を超えて存在するある一つの「物体」であると言えるだろう。詩情（ポエジイ）は所謂意味でもなく、そこに目に見えて存在する美（もの）であり、その存在に対して製作中の僅かな関与があるばかりである、と。出席者24名。

（大西 隆志）

### 2017 ◇第六回ポエム&アートコレクションの 報告

1月14日〜24日

■年始恒例の展覧会が、十日間の日程で神戸文学館で開催された。期間中の来館者は二五六名だった。

出品者 一六名 作品数一八

阿部由子、大西隆志、大橋愛由等、和比古、

香山雅代、鈴木漠、玉井洋子、永井ますみ、

西海ゆう子、福永祥子、牧田榮子、松下玲子、

丸田礼子、水こし町子、山本真弓、由良佐知子

■兵庫・詩の現在展 事務局に届いた会員の詩集・詩誌が展示された。

■兵庫・神戸を生きた詩人を語る

コンサート「歌うように 語るように」

展覧会の特別イベントとして一月二日(土)の午後二時から講演会が開催された。講師はたかとう匡子さん。「兵庫・神戸を生きた詩人を語る」というテーマは、足立巻一、綾見謙、中村隆に次ぐ同じシリーズの四回目で、今回は君本昌久についてだった。一九二八年大阪生まれの君本は、詩集「鷹の破片」「デッサンまで」「ぼくの第九」等いずれも印象深い作品群が並ぶ詩集を全部で九冊残し、又自ら経営した「蜘蛛出版社」からは百冊を超える詩集等を出版している。一方で「市民同友会」「市民の学校」「神戸空襲を記録する会」など市民運動にも広く関わった。六八年の人生を精一杯走り続けた君本昌久の雑誌編集のこだわりと、その生涯をかけての詩業の軌跡を追う講演だった。(講演内容は別欄にて)

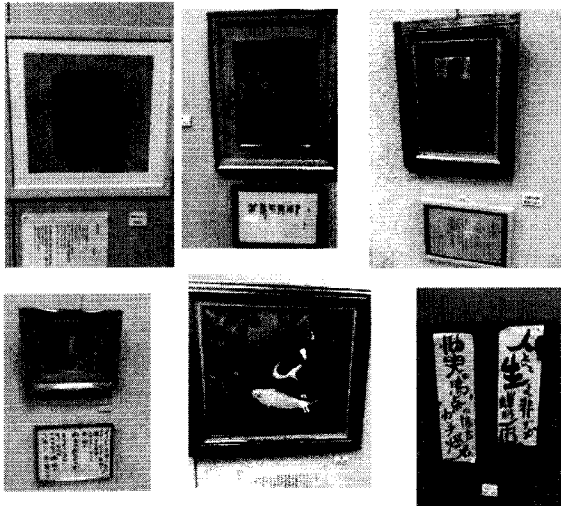
講演終了後、「歌うように 語るように」をテーマに、音楽家の甲斐誠三・恵子さんによるコンサートが開催された。フランスの音楽から選ばれたスキヤットで歌う「ふたりの天使」や「ラ・ボエーム」「愛の讃歌」などの作品を通して、物語性を重視した人生を描いた歌詞や

聴く者に話しかけるような歌い方に引き込まれた。参加者は八十名だったが、申し込みが多過ぎて、お断りした人もいたと文学館の方から聞いた。  
次回予定 第七回 2018年1月16日〜23日  
(丸田 礼子)



「歌うように 語るように」コンサート  
上・甲斐恵子(歌) 下・甲斐誠三(ギター)

### ポエム&アートコレクションの作品数々



※会場雰囲気を知ってもらうために、作品は任意で掲載しています。

### ■ポエム&アートコレクション講演より 『人は魂におぼれることがある』

玉井 洋子  
講演趣旨と感想

「市民運動の先駆者でもあった戦後派詩人」君本昌久  
2017年1月24日(土) 講師・たかとう 匡子

君本さんのモダンリズム詩についてはこれまでも書き、語ってきたが今回は「市民運動の先駆者でもあった戦後派詩人」としての側面を見てみたい。君本さんとはじめて出会ったのが1960年。彼は第二詩集『手』を出版。安保反対デモで荒れたその年の暮れに伊勢田史郎、中村隆、安水稔和氏らと雑誌『蜘蛛』を出版。それに先立ち神戸新聞会館で詩の教室もはじめられていて、そこに安水さんや松尾茂夫さんもいた。当時私は二十歳。その頃君本さんは「手」を安水さんは「鳥」ばかり書いておられた。

資料の年譜(古書籍商間島保夫さん作成)によれば1948年(S・23)に市民同友会が発足しています。君本さんはこの文化団体を拠点に市民の学校、神戸空襲を記録する会、一人だけの蜘蛛出版をたちあげるなど幅広い活動を続けることになりました。69歳で亡くなったのが残念だが、蜘蛛出版で110人以上の詩集を手がけ、永田助太郎 棚夏針手 宮野尾文平 春山行夫ノートなどを残されたのは詩史的にも貴重な仕事だった。

大阪生まれ。立命館大学哲学科卒。年譜ではそこまでしか分らないが、今回調べてみると大阪西区生まれ、西岡高校(現在名)出身。立命館大学の雑誌『石原莞爾研究』(1950年(S・25) 8月号)によると、日蓮宗に憧れていたこと、在日朝鮮人であることなど自身の記述がみられる。

※市民同友会たちあげまでのこの20年を検証すれば、彼が何に傷つき悩んできたかが明らかになるのではないかと思う。

彼は政治や時代に敏感な人で1965年に『思想の科学』にいちにはやく「神戸詩人事件の受難」を寄稿。この時期にこれを書くのは大変なことであったと思う。

第二詩集『手』から。

手は事件だ  
血を流し  
追い詰められてやってくる  
あの酷い事件だ  
やさしく犯し  
容赦なく殺（ばら）す  
あれ……

安保闘争の時代を背景におくと見えてくるものがある。

54歳『デッサンまで』から「ゆめのあとさき」を。

いつまでゆめみれば  
もえつきるのか  
こいでもこいでも  
たどりつけない  
たどりついたとおもったところから  
おちてゆく  
ならくのように  
そらから  
うみから  
ことばから

さげびごえがきこえてくる（後略）

この詩には半世紀にわたる人生の感慨が吐露されているようだ。交響曲の第九になぞらえた九冊目の詩集「ぼくの第九」のタイトルはさすが。しかし、詩はよりリアリズムで書かれるようになっていく。

いつしか  
つむじ風 吹き荒み

コトバの弦 断ち切られ  
歌は 虚空へ舞いあがった……（幻滅）

詩、以外にも「いろまち燃えた福原ノート」（三省堂）や評論、編著など多数もつ君本さんの「しごと」をまとめた形でみられないままになっているのが気がかりでならない。そういう意味でも、モダンリズムからリアリズムへと幅の広い君本さんを今は「未定の詩人」と位置づけておきたい。

たかとうさんは約一時間の講話をそう結ばれた。

私（筆者）は市民の学校を受講し、市民同友会の事務局につとめていたことがあるのでたかとうさんのお話をとりわけ懐かしく聞いた。私が勤務しはじめた1981年頃には、安保もベ平連も、その他多数あった市民運動は終息し、君本さんが事務局長をつとめる市民同友会の事業としての市民の学校と神戸空襲を記録する会の活動が続いているくらいで、組織もそれを束ねる君本さんも疲弊していた。

※市民同友会は長田のむろうち文化協会を足掛かりに1948年（昭和23）年に社団法人の認可をうけて設立された文化団体で、君本さんは1953年（S.28）に事務局職員として入局して設立にはかかわっていない。

事務所維持のために移転をかさねた初期のその一つが神戸新聞会館で、20歳のたかとうさんが訪れた詩の教室のあった場所である。阪神・淡路大震災で被災し、新聞会館は新しく「ミント神戸」に建てかわり、現在そこでたかとうさんの「詩の講座」が開かれているのは感慨深いものがある。

君本さんの詩に少なからぬ影をおとしている組織のあがき。にもかかわらず彼は、発足当初の設立メンバーの一人、ハタセンこと畑専一郎氏が提唱されたフェビアンサイエティの理想を愚直なまでに守りぬこうとしていた。1993年、その45年の歴史を閉じるにあたって刊行された市民同友会創立45周年記念誌『夢の跡めくれば』に記されていた君本さんの深い思い。

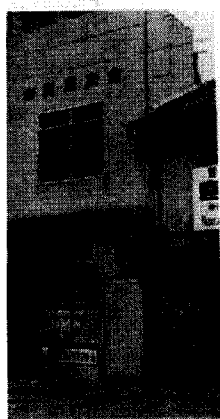
—そうだ人は魂におぼれることがある—  
受講料が免除されるといふ君本さんの誘いのおかげ、軽い気持ちで事務局に入ったのだが、通算18年。とうとう市民同友会と28年続いた市民の学校のフイーナレを君本さんと共に見てしまった。



講師・たかとう匡子会長



神戸文学館会場風景



右上・市民同友会



左上・君本昌久



左下・『夢の跡めくれば』

連詩「イカロス」の巻

1

イカロスの悲劇を彼は我が事にしたまま  
燃えない言葉を探し続けた  
高く 高く 季節を超えて飛翔するには  
優しい言葉いくつかあれば  
事足りるのだと漸く気付いた

梅村 光明

2

おかえりなさい  
言えないままに母 その母 ひい祖母  
無明長夜に花茨咲く

由良佐知子

3

父を見失った時  
墜ちた  
ミゼリス  
迷宮から  
ミゼリス  
迷宮へ  
墮天使

玉井 洋子

4

遙か眼下の紺碧の海よ わが祖国  
クレタ島の王 ミノスに告げる  
父ダイダロスがつくつてくれた翼は永遠にハッピーだ  
井之上幸代

5

ころがる糸玉

記憶の痕跡

ほどき

石工は鑿る

白いマーメイド

山口 洋子

6

静寂もひとつの姿  
ことばをなくしたクスギの木  
青い空を さわる

内田 正美

7

ロマネスクの  
紅い星空  
記憶点滅  
漣のような笑みへ  
うつとりと落ちていく

丸田 礼子

8

朝方の薔薇の微かな吐息  
花弁に零れた涙  
陽を求め 枝葉は伸びる

山本 真弓

9

いくつかの優しい言葉の容に  
あなたが いますか  
わたしも いて いいですか  
見えそうな かおりそうな塞で  
やはり手を つないで きましょう

牧田 榮子

10

砂被りにあれは荒川洋治か二日続けて映り出て稀勢里  
より気になったのは詩人の眼があつた水駅の詩人の眼が  
見ていた先にある詩から離れていく遠いところの気分

梅村 光明

11

なぜに闘わないのか水入りまで  
しずかにすすめられていた  
ひめしやは葉裏に巣を囲い  
メジロの雛ひいふうみいよ  
息ひそめ視つめるひとの眼そらの眼

由良佐知子

12

桑の実が熟れたと蝙蝠がなだれこんだあたりから  
闇がひろがり星々の乖離に立つ言葉  
プロミネンスの余光に約束された明日

玉井 洋子

〔留書〕 \*制作 二〇一七年 五月一六日〜二二日

\*媒体 メール&フアクス

兵庫県現代詩協会の会員でもある「ア・テンポの会」の仲間に、久しぶりの連詩作品への挑戦を伝えると、すぐに快諾を得てのスタート。一連目の神話仕立てが、四連目にまで引き摺られた嫌いがあるが、一二連目での光に約束された明日が記されたことを喜ぶと共に、行数に制限のある中、各作者は存分に楽しませての瞬時とも言える時間で、連詩「イカロス」の巻の興行を終えることができたことを、連衆に感謝申し上げて留書とする。

【梅村 光明】

◇兵庫県現代詩協会創立二十周年記念会  
&『ひょうご現代詩集2016』出版記念会  
—詩で架けよう未来に向かって—

2017年3月18日(土) 11時30分より元町風月堂ホールにて、兵庫県現代詩協会創立20周年記念会&『ひょうご現代詩集2016』出版記念会が行われた。

震災から22年の月日が流れたが、震災直後、故伊勢田史郎氏が立ち上げた「アート・エイド神戸」でアンソロジー『震災詩集』を3冊出版した後に、これがきっかけとなり協会が発足した。本年は設立から20年目を迎える。

まず、たかとう匡子会長から開会の辞が述べられた。協会として様々な取り組みをしているが、読書会など詩で深く繋がる団体となっている。会員の高齢化により会員数は減少しているが、これから未来に向けて新しい会員と共に、充実した団体として歩んでいきたいと、未来へ向けてのエネルギーシナジーをされた。次に来賓として御臨席された、関西詩人協会会長有馬敏氏、岡山県詩人協会会長重光はるみ氏から心温まるご祝辞をいただいた。

イベントに入り、会員の永井ますみ氏がDVDに纏めてくださった協会の20年の歩みを、映写した。資料あつめに労力がかかったが、懐かしいことや楽しかったことが場面ごとに思い出され、胸を熱くした。初代会長安水稔和氏もお元気に登場されメッセージを託された。

会員の主宰する同人誌の紹介には9詩誌が参加して、それぞれの詩誌の特徴などを工夫を凝らして発表された。参加詩誌は、ア・テンポ、OCT、風の音、現代詩神戸、鶴鶴、多島海、プラタナス、Melange、Messier。

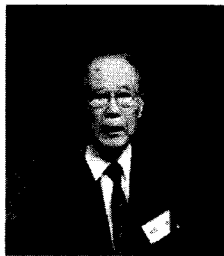
一詩誌の持ち時間が少なかったこともあり、予定時間を超えてしまっただけのことだった。その後、昼食となり、今回は座席をくじ引きで決め

たこともあり、初めての方と会話を交わすこともでき、会場は大変賑わった。「Peppal blanco」のラテン音楽の演奏も大いに会場の雰囲気盛り上げ、代表の外園美穂さんのバイオリンも熱演だった。

『ひょうご現代詩集2016』の編集責任者大橋愛由等氏より出版の経過などが話された後、このアンソロジーに参加した全ての作品から1部を抜き出し、「135の言葉」として朗読した。「神戸ドラマ倶楽部」の山川清文氏、「劇団ここから」の橋美恵子氏が朗読をした。一瞬の風が吹き抜けるような短い数行を紹介し、詩人の感受性の片鱗を少しでも感じられ、切り取りされた詩の言葉ですが、声に出してみることで、詩の森を散策するように受け取っていただけたと思います。

お開きの時間となり、時里二郎副会長が、終りの挨拶をした。これからも、協会のイベントや勉強会になるべく参加していきましょと、今後の意気込みを話された。関西詩人協会から有馬会長の他、大倉元事務局長、岸本嘉名男氏、楠次郎氏、また、岡山県詩人協会から重光会長、くにさだきみ氏が遠方から来て下さり、近隣の詩の団体との詩を通じての輪が広がるよい機会になったと思う。会員も多数参加して、会員同士の繋がりがもてき有意義な会となった。なお、今回欠席の安水稔和顧問よりご著書「春よめぐれ」が参加者全員に謹呈された。参加者64名。(会員外6名含む)

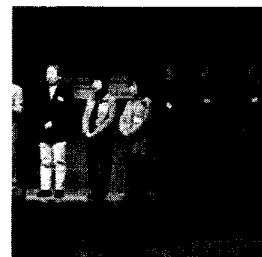
(報告) 神田さよ



右・関西詩人協会・有馬敏会長



左・「135の言葉」より朗読のシーン  
橋美恵子・山川清文両氏



右上 風の音  
右下 ア・テンポ  
左下 多島海



※誌面の都合上、同人誌紹介の舞台写真の一部のみですが、HP等で掲載予定。

◇会員の詩誌

2016年12月〜2017年6月

- 74号(高谷和幸)
- ロジリア16(時里二郎)
- アリゼ176・177・178号(以倉紘平)
- 木想5・6号(高橋富美子)
- 花筏30号(住吉千代美)
- おたくさII 23・24・25(鈴木漠)
- 多島海31号(江口節)
- Messier 48・49号(香山雅代)
- Poetry Edging 35・1・36・1(寺田操)
- 現代詩神戸256・257号(永井ますみ)
- 風の音13・14号(たかとう匡子)
- まほろば40・41号(たかはらおさむ)
- 別嬢102・103号(高橋夏男)
- 鳥 71号(足立勝歳)
- リフレクション17号(川田あひる)
- 河口から特別号(季村敏夫)
- Contra 37号(坂東里美)
- ガーネット81号(神尾和寿)
- 月刊めらんじゅ120号〜124号(大橋愛由等)
- ア・テンポ51号(玉井洋子)

### ◇兵庫県現代詩協会創立二十周年記念会 &『ひょうご現代詩集2016』出版記念会 —詩で架けよう未来に向かって—

2017年3月18日(土) 11時30分より元町風月堂ホールにて、兵庫県現代詩協会創立20周年記念会&『ひょうご現代詩集2016』出版記念会が行われた。

震災から22年の月日が流れたが、震災直後、故伊勢田史郎氏が立ち上げた「アート・エイド神戸」でアンソロジー『震災詩集』を3冊出版した後に、これがきっかけとなり協会が発足した。本年は設立から20年目を迎える。

まず、たかとう匡子会長から開会の辞が述べられた。協会として様々な取り組みをしているが、読書会など詩で深く繋がる団体となっている。会員の高齢化により会員数は減少しているが、これから未来に向けて新しい会員と共に、充実した団体として歩んでいきたい。次に来賓として御臨席された、関西詩人協会会長有馬敏氏、岡山県詩人協会会長重光はるみ氏から心温まるご祝辞をいただいた。

イベントに入り、会員の永井ますみ氏がDVDに纏めてくださった協会の20年の歩みを、映写した。資料あつめに労力がかかったが、懐かしいことや楽しかったことが場面ごとに思い出され、胸を熱くした。初代会長安水稔和氏もお元気に登場されメッセージを託された。

会員の主宰する同人誌の紹介には9詩誌が参加して、それぞれの詩誌の特徴などを工夫を凝らして発表された。参加詩誌は、ア・テンポ、OCT、風の音、現代詩神戸、鶴嶋、多島海、プラタナス、Melange, Messier。

一詩誌の持ち時間が少なかったこともあり、予定時間を超えてしまつて申し訳ないことだった。

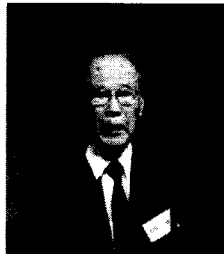
その後、昼食となり、今回は座席をくじ引きで決め

たこともあり、初めての方と会話を交わすこともでき、会場は大変賑わった。「Pepal blanco」のラテン音楽の演奏も大いに会場の雰囲気盛り上げ、代表の外園美穂さんのバイオリンも熱演だった。

『ひょうご現代詩集2016』の編集責任者大橋愛由等氏より出版の経過などが話された後、このアンソロジーに参加した全ての作品から1部を抜き出し、「135の言葉」として朗読した。「神戸ドラマ倶楽部」の山川清文氏、「劇団ここから」の橋美恵子氏が朗読をした。一瞬の風が吹き抜けるような短い数行を紹介し、詩人の感受性の片鱗を少しでも感じられ、切り取りされた詩の言葉ですが、声に出してみることで、詩の森を散策するように受け取っていただけたと思います。

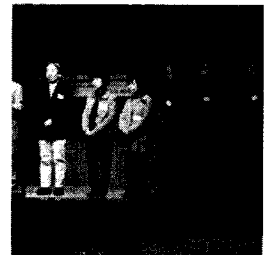
お開きの時間となり、時里二郎副会長が、終りの挨拶をした。これからも、協会のイベントや勉強会になるべく参加していきましょつと、今後の意気込みを話された。関西詩人協会から有馬会長の他、大倉元事務局長、岸本嘉名男氏、榑次郎氏、また、岡山県詩人協会から重光会長、くにさだきみ氏が遠方から来て下さり、近隣の詩の団体との詩を通じての輪が広がるよい機会になったと思う。会員も多数参加して、会員同士の繋がりもでき有意義な会となった。なお、今回欠席の安水稔和顧問よりご著書「春よめぐれ」が参加者全員に謹呈された。参加者64名。(会員外6名含む)

(報告 神田さよ)

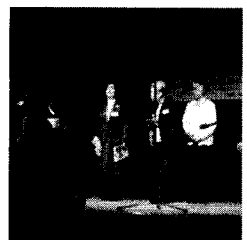


右・関西詩人協会・有馬敏会長

左・「135の言葉」より朗読のシーン  
橋美恵子・山川清文両氏



右上 風の音  
右下 ア・テンポ  
左下 多島海



※誌面の都合上、同人誌紹介の舞台写真は一部のみですが、HP等で掲載予定。

### ◇会員の詩誌

2016年12月〜2017年6月

- Oct. 4号 (高谷和幸)
- ロジリア16 (時里二郎)
- アリゼ176・177・178号 (以倉紘平)
- 木想5・6号 (高橋富美子)
- 花筏30号 (住吉千代美)
- おたくさII 23・24・25 (鈴木渚)
- 多島海31号 (江口節)
- Messier 48・49号 (香山雅代)
- Poetry Edging 35・1・36・1 (寺田操)
- 現代詩神戸256・257号 (永井ますみ)
- 風の音13・14号 (たかとう匡子)
- まほろば40・41号 (たかはらおさむ)
- 別嬪102・103号 (高橋夏男)
- 鳥 71号 (足立勝歳)
- リフレクション17号 (川田あひる)
- 河口から特別号 (季村敏夫)
- Central 37号 (坂東里美)
- ガーンネット81号 (神尾和寿)
- 月刊めらんじゅ120号〜124号 (大橋愛由等)
- ア・テンポ51号 (玉井洋子)



### ◇追悼・直原弘道 『一乗寺鉄男さんに出会ってから』

直原さんは、一九三〇年生れだから、私より四年先輩にあたる。一九四五年八月十五日、私は十一歳、直原さんは十五歳。この時代の小学五年生と、中学三年生の差は、実体験の認識に、相当な開きがある。後期高齢者になっても、この差は変わらず、いわば兄貴世代とも言える。たとえ一年違いでも同じことであると思ってきた。

一九五七〜八年、私は『木賃宿』同人であった。元町商店街を、なかけんじ氏と歩いていて、出会った。「一乗寺鉄男さん」と紹介された。『輪』創刊後、間もないころであろうか。

メーデー、六〇年安保、後に第三紀層で一緒になる安部繁男、北見哲也たちに出会った湊川公園。私はあまりにも小規模の団体で参加していたが、気持ちだけは旗旗を持っているつもりだった。

会場で見た共産党の五人乗りピックアップは、ブルーと白。前部バンパーに立てられた赤い小旗は、党名だけが小さく染め抜かれ、マスコミ取材班に似てスマートに見えた。

運転していたのが、一乗寺鉄男さんだった。クルマのデザインをしたのは彼だったかもしれぬ。一乗寺さんの家は、赤松徳治さん宅のそばから坂を上がったところにあった。このクルマが駐車していたのを、ときおり見た。

ここに最後までお住まいだったらしい。一乗寺さんは、直原さんとなり、親しい人々は「じきさん」と呼びかけていた。私は、長らく直原さんと会っていない。『現代詩神戸』の作品と頂く詩集だけの間柄となった。

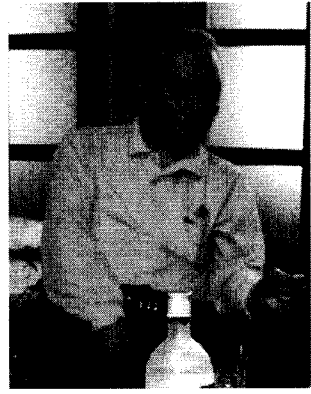
二〇〇六年六月、兵庫県現代詩協会の会則第5条第2項が、「この会に入会後2年を経過した会員は、満80歳に達した次期の会計年度から会費を免除される。(名誉会員)」と改定された。

同じく第16条②も改定され、「……名誉会員は、会を運営するために選出される理事会への被選挙権を除いて、会員としてのすべての権利が保障される。」となった。

この規約改定するとき、直原弘道さんが提案要旨の説明をされた。やがて、わが兵庫現代詩協会の年齢も高くなり、二十二名の名誉会員制度は、二〇一一年の規約改定で中止された。

私に「おい三宅」と呼び捨てにする友人は、たった一人しか残っていない。直原さんは、「三宅クン」だったが、こういう先輩は一人も……。

(三宅 武)



入院される前の年、2010年6月に直原邸でやった連詩の会の時の写真。

### ◇詩のフェスタ告知

ふれあいの祭典―詩のフェスタひょうご―  
主催／ふれあいの祭典詩のフェスタ実行委員会・兵庫県現代詩協会・兵庫県・兵庫県芸術文化協会  
10月8日(日) 13時30分〜16時30分  
ラッセホール (神戸市中央区中山手通4の10の8)  
・講演会・平田俊子氏 演題「詩を書く時間―言葉を中心とする―」  
・自作詩朗読会 ぜひご応募下さい。  
連絡先・神田さよ TEL0798(53)0686  
(詳しい案内のチラシは8月に会員の皆様にお送りします。)

### ◇会員の発行書

2016年12月〜2017年6月

故・伊勢田史郎『またで散りゆく―岩本栄之助と中央公会堂』 編集工房ノア

安水稔和『一行の詩のためには 安水稔和未刊散文集1961〜2016年』 沖積舎

玉川佑香詩集『戦争を食らう―軍属・深見二郎戦中記』 風来舎

山崎啓治詩集『もっぺん―粹なべを』 ブイソーソリューション

増田まさみ句集『遊絲』 霧工房

佐藤勝太詩集『生命の絆』 文芸社

佐伯圭子詩集『空ものがたり』 編集工房ノア

安水稔和詩集『甦る』 編集工房ノア

植村孝詩集『水の化学者になると』 私家版

田中信爾詩集『Sons』 竹林館

鈴木賀恵詩集『ムーブメント』 編集工房ノア

野口幸雄詩集『妻が出かけた日』 澤標

今村欣史『触媒のうた―宮崎修二郎翁の文学史秘話』 神戸新聞総合出版センター

尾崎美紀詩集『出発はいつも 空とぶキリン社』 空とぶキリン社

尾崎美紀詩集『出発はいつも 空とぶキリン社』 空とぶキリン社

尾崎美紀詩集『出発はいつも 空とぶキリン社』 空とぶキリン社

尾崎美紀詩集『出発はいつも 空とぶキリン社』 空とぶキリン社

尾崎美紀詩集『出発はいつも 空とぶキリン社』 空とぶキリン社

尾崎美紀詩集『出発はいつも 空とぶキリン社』 空とぶキリン社

尾崎美紀詩集『出発はいつも 空とぶキリン社』 空とぶキリン社

### ◇読書会の予定・講師について

詩のフェスタに向けての準備とし、講師・平田俊子の詩について読書会を7月29日(土) 13時〜15時、私学会館301号で開催。チューターは野田かおり氏。氏は1982年姫路市生まれ。高校時代より詩を書き始める。第一詩集『宇宙(そら)の箱』(2016年、澤標)、『イリプス』、『時刻表』同人。読書会では現代詩文庫『平田俊子詩集』、『戯れ言の自由』を中心に読みます。詩の言葉について考えていきたい。同封の葉書で参加を申し込んで下さい。締切は7月20日まで。

平田俊子氏プロフィール 1955年島根県隠岐島生まれ。1983年、詩編『鼻茸について』などで第1回現代詩新人賞受賞。2004年、『詩七日』で第12回萩原朔太郎賞受賞、2016年、『戯れ言の自由』で第26回紫式部文学賞受賞など。小説や戯曲、随筆の分野でも活躍。

矢向季子のこと

季村 敏夫

矢向季子（生没年不詳。神戸市林田区東尻池町二丁目一三八）の作品を紹介したい。『噩神』創刊号（昭和十年五月、神戸市兵庫区門口町一八七）に二篇掲載されている。初めて知った詩人だが、同じ号の男性の作品より断然いい。真っ向から迫る響きがあるからだ。

破廉恥祭

— 謹んで竹中郁に捧ぐ —

象牙の詩集の肉に食ひ入り、  
薄い小麦色の髪に漣の接吻を味つた。

たまたま禁断の実を盗み、  
頭上をかすめて強烈な稲妻を感じた。

鳴門海峡を渡る船の上層にのぼり、  
うずまく海鳥の落日を飽かずに眺めた。

攻撃の火花ですばやく煙草の火をつけた。  
束縛されない囚人！

私の脳髓にこつばみじんに打砕く鉄棒の如き、  
巨人を探して疾駆する、縞馬の鬣。

白い衣服に滲んだ青い血痕はをのれの味で苦い、  
限られた広さを悶える金魚、抹殺された信号旗。

みんな、みんな、私の面を張り飛ばすのだ、  
私のこの肉体にどす黒い鞭の轍をのこしてくれ、

おお、破廉恥祭の交響楽・・・  
哄笑は、新世界に爆発する素晴らしい弾丸！

魚真学

紫で 青空と空気を切った鮮やかな楽園  
白で 青空と空気を切ったあなたの剣  
この天地の中澄んだ若さの剣に

そら 青空が光りながらおろる 葩がかゝつてゐる  
そこで私はあなたにナンバーをつける  
私は濡れた帆をおろして

あなたの中に這入つてゆく 私のなかの楽しい鷗

群なして飛ぶ白い羽音は  
あなたの中に鷗の舞踏会を開始する

私はあなたの若き剣に麻痺し  
燦めく朝露に光る葡萄の房のやうに重い  
あなたの液汁に 私のかよはい蔓が

体温にかける虚しい言葉になる  
たよるやうな祈りに似た言葉に私の 珥 がゆらぐ

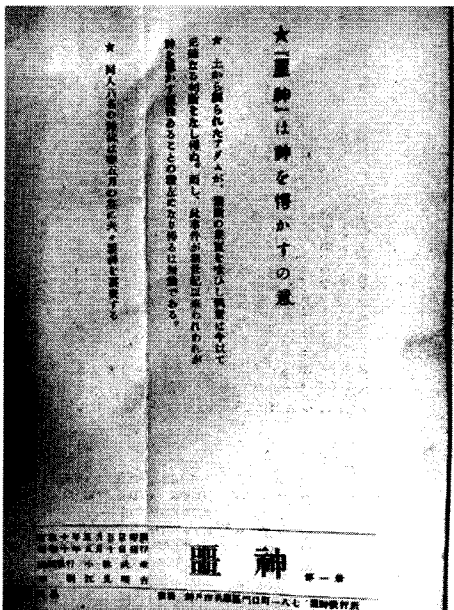
シュルレアリスムという觀念に溺れがちの男性の傾向と違い（岬絃三は例外）、詩の觀念を促す存在の痛みが伝わる。鹿児島島の藤田文江、浜松の塩寺はるよ、小樽の左川ちかと並び称される詩人になったことが予想される。

詩誌『噩神』手元の漢和辞典には「噩」は驚ろく、おごそかなさま、とある。昭和十五年三月三日払暁の神戸詩人事件の五年前、小林武雄が刊行している。矢向季子以外の同人はすべて男性で、亜騎保、岬絃三、中川陶雄、加藤一郎である。

藤田文江をあげたが、『噩神』創刊号には二十四歳で夭折した藤田へのオマージュが次のように捧げられている。「詩を遠く突き放し、冷たい光りの中に、縦横無尽に、思ひ存分の官能のうめきを聞き、又その奥へ一歩一歩さぐり込まねばをさまらぬ気焔が、苦しみの中で楽園に舞う小鳥達の如くびちびちしてゐる。そしてこの小鳥達の助骨の中で電流のやうな早さで駆けめぐつてゐる血脈の音を静かに聞いてゐるではないか」。矢向季子と藤田文江の言葉は同じ痛みからそそがれているのではないか。

◆藤田文江に関しては、たかとう匡子著『私の女性詩人ノート』（思潮社、二〇一四年）六三〜七七頁、『噩神』は足立巻一著『親友記』（新潮社、一九八四年）二二三〜二四二頁参照。

※『噩神』は神を愕かすの意、とある第一号書影



## 会員の詩集評

時里 二郎

安水稔和『一行の詩のためには』（沖積舎）。2013年に刊行された『ぼくの詩の周辺』に続くもの。1961年（三十歳）から2016年（八十五歳）までの散文集。今までの刊行書からこぼれた文章だが、詩について、言葉について、日常について、実に興味深い文章に溢れている。折りに触れての依頼に応えた短い文章も多いのだが、むしろそれだからこそ、詩人の思いがぎゅつと詰まっている。例えば「記憶に残る短詩」では、八木重吉や暮鳥など、安水さんの魅かれる短詩を挙げて、それぞれに短いコメントを書いておられるのだが、図らずもそれが安水詩の要諦に触れている。橋本千秋さんの詩にふれて「詩を書けば、自然に短い詩になり、しかも書きたいことを書き切ってしまう」とある。ちなみに、詩人の三角みづ紀さんがこの本について神戸新聞に書評を寄せている。その結びの部分。「神戸には度量のおおきな詩人がずっと住んでいて、それが安水さんで、神戸に住むひとびとにとつて誇らしいことであるし、わたしもこのような詩人として生きたいと切に願う。」

同じく安水さんの『神戸わが街』（神戸新聞総合出版センター）は、1955年から2015年までの六十年間に書かれたものから集められた未刊散文集。文字通り、神戸にかかわる文章が集めてある。やはりII章の「阪神大震災」そして新しい出発」で括られた章に引き付けられるのだが、ここでは母の生地での幼い頃の淡い記憶を下敷きにした詩を引用しよう。懐かしい、まぼろしのような地名をひらがなで包み、名なし坂（言葉の及ばない世界との境）の向こうの世界が、母に抱きしめられる象徴的な行為で暗示されている珠玉の一篇。その後半を、「ついたよという母の声。もつと行こうよ。母の膝を揺すって私は言／いつのる。白い道が谷の奥へのび／る。なかにだに。だんよ。さみず。／うるすべ。おくらうち。池があつて坂があつて名な

し坂。そのさき／は、坂のむこうには。母は黙つて／幼い私を抱きしめる。」（さかのさき）

玉川侑香『戦争を食らう 軍属・深見二郎戦中記』（風来舎）。深見二郎は玉川さんの父。第二次世界大戦中、インドネシアのアンボン島で木造船を作る仕事に従事していた。赤紙一枚で招集されるのを逃れるために「軍属」として「国外逃亡」する、そのための手段として、現地で作業員の徴用や造船の材料の調達を主な仕事とする責任者として働いていた。終戦の翌年に帰国。玉川さんは、亡き父の残した膨大な手記を、三年がかりでこの「詩物語」として完成させた。その間、兵站としての木造船建造の意味や、戦没した船やそれに関わつてなくなつた人々のことなど、戦争資料を渉猟し、アンボンに行つて、手記に出てくる場所を確かめたりした。

まず、「詩物語」という発想がよく効いていて、父の手記を消化し、父の思いが詩人に取り憑いたように、言葉に力があり、リズムよく読み手を物語の中に引き込んでいく。おしまいまで一気に読めるのは、けれど玉川さんの言葉の力であろう。何よりも、深見二郎という人物の魅力。当時の日本人としてはめずらしいほど日本という国や社会を突き放して見ていること、自分の生きざまと国家の運命とを切り離して考える自律の精神の持ち主であつたことに新鮮な驚きを感じた。また、実証的な戦争の記録として貴重な一冊でもある。観念的な戦争の悲惨なイメージに引張られることなく、戦争の現場のディテールを冷静に見つめている眼差しが、詩物語としての構造を「梁」のように支えている。意義深い労作を讀みたい。

山崎啓治『もっぺん』（ブイツーンリレーション）は第三詩集。前詩集では、ユーモアの精神と砕けた言葉遣いに溢れる山崎さんの人間味が印象に残つていて、世の中の流れに棹さし、皮肉、風刺にみなぎる批評精神の小気味のいい表現にいつそう味わいが増している。例えば「免じて『承認』」は、缶ビールをコンビニで買うときの「コマ」を詩にしているのだが、世間の風潮に違和感を覚える山崎さんの思いが実にうまく表現されていて秀逸。世の中を風刺しつつも、自分をも

突き放して見るその批評精神に光るものがある。老いの寂寥感が深く滲む佳品もある。「ことしも／五月雨は／いなくなつた友の／亡霊に会いにくるのです／そして／雨滴は／残されて／傘ももたない僕たちの／血の／にじむ傷口を這つて／舐めるのです」

増田まさみ句集『遊絲』（霧工房）は第五句集になる。句歴についてよく知らないが、前句集『ユキノチクモリ』の「言霊を抜かれて雪は降るのです」という句は、どこかで目にしたことがあつて、雪の生命感を「言霊を抜かれて」と言い出した感覚の深さと、「降るのです」と口語で止める言葉の感性の清新さに感心したので思い出す。

以下、心にとまつた句を引いてみる。

かげろうや太古を奔るわが屍

だんだんにそら怖ろしき螢狩

蒙古斑蛇の羽音のどこからか

木の洞（うろ）に存（ながら）えている笹かな

みんみんや死は凸凹に乾きゆく

虚貝（うつせが）いごまんの春の死に代わり

心中に似かよう線香花火かな

水鳥や死を一瞬の綺羅としぬ

衣囊（ボケツト）に小さき父の吹雪くかな

恣意的に引いたのではないが、「死」のほたりを行きかう句に秀句が目立つように思う。研ぎ澄まされた感覚によつて布置された言葉が、幻視の世界をざっくりと提示しているように見えるが、よく見れば、実に繊細な手際でディテールが仕込まれている。

佐伯圭子『空ものがたり』（編集工房ノア）の抒情の世界にすっかり魅了された。とりわけ、二十年経つた震災をかえりみての「塔の上」や「空中に置いた片足」は、言葉が記憶を辿るといふよりは、言葉のほうに記憶をほぐし、記憶を越えた震災当日の空気が光景を蘇らせている。「風だろるか わたしをここへ運び／塔の上に押し上げたのは／押し上げられながら 汗して歩いた道のさまたまの／匂いが立ち昇つて来るのを知る 足もとまで／街の騒めきの隙間 少女らの声が／まだ整わないままふくらんでいる／激しく揺れた街まちが 失つたものを抱えたまま／光りながら放射

状に「拡がっていく」(「塔の上」部分)。

また、「空中に置いた片足」はさらに張り詰めた緊張感のなかに、震災当時が呼び覚まされる。二十年という時間を隔てた記憶が、現在とぶつかり、それが震災の底知れぬ恐怖と、闇を踏み抜くような不安を今なおかかえている。その後半部の表現はみごとだ。「揺れながら」駆け上がった二階もまた揺れて／ゆさに震え／水や食べ物求め／それぞれの位置に向かおうとして／足を踏み出すと／階段が落ちて／踏み出した片足が／今も 空中に／置いたまま」

佐藤勝太『生命の絆』(文芸社)は十四冊目の詩集。

詩を書くこと、言葉をそばに日々を暮らすことが、佐藤さんの生きがい。今度の詩集もさまざまな日々の感慨を直に書いておられるが、やはり老いの悲哀を綴った作品に心を魅かれた。「朝起きて夕方まで／時計を見ながら過すが／何をしているのか意味がないように／何の目的だったかも判らず／夕方には酒場の隅で酔っていた／こうして過す何十年か／なんら得たものはないが／今も尚何か誘うものがある／私の意思は曖昧に／明日も頑張ろうなんて／またも考えている」(「日々の行方」)平易な言葉のなかに、わだかまるような、もどかしいような心の重りを抱えて生きている、そんな悲哀がにじみでていて、味わいのある作品だ。佐藤さんは、おそらく、詩が、その心の重りを生きたる源にかえる不思議な力を持っていることを感じておられるに違いない。

(今期は会員の刊行詩集が13冊もありました。うれしかぎりですが、そのため、今号は、2016年1月〜2017年3月までの奥付のある詩集7冊を採りあげました。4月以降の詩集については次号に持ち越します。)

### ◆常任理事会報告

■一月二十九日第五回常任理事会、私学会館にて。常任理事九名出席。二十周年記念号アンソロジー進行状

況。ポエム&アートコレクション展報告、講演会参加者は八十名。選挙結果による常任理事増員の件。創立二十周年記念会について、詳細および役割決定。総会及び二〇一七年度詩のフェスタの講演講師の検討。

■三月十八日第六回常任理事会、風月堂ホールにて。常任理事九名出席。二〇一七年度の新役員選挙結果報告と受諾者の役割決定。投票数七八通(白紙二通)総投票数六九五票。選挙管理入立会いのもと開票。総会にて承認後、新役員発足。その他、兵庫県芸術文化活動支援事業の補助金の報告。

■四月九日第七回常任理事会、私学会館にて。「協会二〇周年記念会&『ひょうご現代詩集2016』出版記念会」報告及び反省。参加者六五名。二〇一七年度総会について、会計報告、事業報告、次年度事業計画、次年度予算案、新役員などについて。総会の役割分担と進行の確認。講演は和比古氏「私の科学と詩の歩み」。

■五月二十七日第一回常任理事会、私学会館にて。常任理事十二名出席。(役割分担)会報・大西隆志、会計・野口幸雄、入退会&名簿・尾崎美紀&事務局、記録・尾崎美紀、ホームページ&アンソロジー・大橋愛由等&北野和博、ポエム&アートコレクション・和比古&丸田礼子、読書会・神尾和寿、文学紀行・玉川侑香&事務局。来年度の総会は西宮もしくは明石にて。ホームページの充実。読書会、七月二十九日(土)取り上げる詩人「平田俊子」・チューター・野田かおり。ポエム&アートコレクション・二〇一八年一月十六日〜二十三日。講演は二十日(土)。文学紀行・三月十八日(日)行き先は未定。「詩のフェスタ」十月八日(日)十三時三十分から、ラッセホールにて。講演・平田俊子氏。

■六月十一日第二回常任理事会、私学会館にて。以上常任理事十名出席。ポエム&アートコレクションについて変更点の検討、十七日(水)は休館日搬入は一月十五日(日)十三時〜十三時三十分、宅配での搬入は要相談。展示準備十三時三十分〜十五時、時間厳守、搬出…一月二十三日(火)十五時〜十五時三十分、時間厳守。宅配による搬出は要相談。参加費は一点につき五百円、ひとり二点まで。申し込み締切り十月十二日(木)、特別イベントは講演「竹中郁について」、講師たかとう匡子、今回コンサートは開催しない。その他、HPにて案内を掲載する。(HP立ち上げを北野、大橋両氏に依頼)。展示会期中の当番は、出品者はボランティアで対応する。

### ◆事務局より

会員発行の著書、詩誌などの出版物は事務局へお送りください。詩に関するイベント等の案内もよろしくお願ひします。会員の動静の連絡もお教えください。

### ◆会計より

今年度の会費を同封の振込用紙でお納めください。なるべく速やかにお願いします。年会費は4千円です。郵便振替口座00920・9・111243  
口座名 兵庫県現代詩協会  
お忘れのないようによろしくお願いいたします。  
前年度まで未納の方も速やかに納入をお願いします。  
協力金  
鈴木漢氏  
ありがとうございます。

### ◆会報担当より

会報へのエッセイや詩の投稿をお寄せください。また、会員の受賞や、活動報告などの情報も是非会報担当までお送りください。会報担当は大西です。どうぞよろしくお願ひいたします。

大西隆志

〒670-0061 姫路市西今宿3-1-9-702

メールアドレス furado@extra.on.ne.jp

(ふちらかに) Furadou\_t@gmail.com

### ◆新入会員をご紹介ください。

担当の尾崎美紀・神田さよまでお知らせ下さい。  
また住所変更、退会の会員は事務局までご連絡下さい

連絡先・入退会担当/尾崎美紀 事務局/神田さよ

◇他団体の著書

2016年刊詩集(徳島現代詩協会)・年刊詩集ふく  
い2016(福井県詩人懇話会)・とっとり詩集第7集  
(鳥取県現代詩人協会)・宮城の現代詩2016(宮城  
県詩人会)・いわての詩2016(岩手県詩人クラブ)  
北海道詩集2016(北海道詩人協会)・千葉県詩集4  
9集(千葉県詩人クラブ)・石川詩人会 かなざわ現代  
詩コンクール受賞作品集・群馬年刊詩集2016(群  
馬詩人クラブ)・高知詩の会通信16号(高知詩の会)・  
香川県詩集設立20周年記念号20集2016年度版  
(香川県詩人協会)・2016熊本県詩集14集(熊本  
詩人会)・中日詩人集56(中日詩人会 大西美千代)  
・山形の詩2016(山形詩人会)・鹿児島県詩集20  
16(鹿児島県詩人協会)・秋田県現代詩年鑑2017  
(秋田県現代詩人会)・島根年刊詩集45集(島根県詩  
人連合川辺真)・現代詩2017(日本現代詩人会)・  
長野県詩集49号2016年(長野県詩人協会)

◇他団体の会報・詩誌

中四国詩人会ニューズレター(中四国詩人会岡隆夫)・  
すずかけ353〜359号(公財兵庫県芸術文化協  
会)・日本現代詩人会会報144〜146号(日本現代  
詩人会)・長野県詩人協会会報133・134号(長野  
県詩人会)・福岡詩人会会報166号(福岡詩人会)・  
大分県詩人協会会報147・148号(大分県詩人協  
会)・工藤和信)・呼吸II41号(現代京都詩話会司由  
衣)・奇蹟A(津坂治男)・群馬詩人クラブ会報298  
〜300号(群馬詩人クラブ)・山梨県詩人会会報18  
号(山梨県詩人会)・こまつかん)・とっとり詩人35号  
(鳥取県現代詩人協会)・手皮小四郎)・いちご通信16  
号(大分県詩人連盟)・岡山県詩人協会だく(岡山県詩  
人協会)・斎藤恵子他)・島根県詩人連合会会報81号(島  
根県詩人連合)・山根)・宮城県詩人会会報24号(宮城  
県詩人会)・いしかわ詩人43号(石川詩人会)・内田  
洋)・福島県詩人会会報114号(福島県詩人会)・渡辺  
孝行)・山形県詩人会会報(山形県詩人会)・松田達男)・  
茨城詩人協会会報23号(茨城県詩人協会)・裕杏子)・  
中日詩人会会報188号(中日詩人会)・岩井昭)・岐阜  
県詩人会会報8号(岐阜県詩人会)・頼圭二郎)・岩手県

詩人クラブ会報91号(東野正)・詩の会復刊39号(宮  
城県詩の会)・玉田一陽)・秋田県現代詩人協会会報55  
号(横山方)・福井県詩人懇話会会報94(福井県詩人  
懇話会)・渡辺本爾)・奇蹟0(津坂治男)

◇詩集募集

・第19回小野十三郎賞。対象は詩集または詩評論書。  
2016年7月1日から2017年6月30日までに  
刊行されたもの。応募締切は2017年7月10日(当  
日消印有効)。著者本人が著作二部を送付。受賞は小野  
十三郎賞、賞金五十万円。送付・応募先は大阪市中央  
区谷町7-2-2-305 大阪文学学校内 小野十  
三郎賞事務局。詳細は06-6768-6195まで。

・第28回富田碎花賞。対象は詩集。2016年7月  
から2017年6月末日までに刊行された奥付のある  
もの。応募期間は2017年6月1日から2017年  
7月31日必着。詩集二部を送付。正賞賞状・副賞五  
十万円。送付・応募先は芦屋市精道町7-6 芦屋市  
教育委員会 生涯学習課 富田碎花賞係。詳細は電話  
0797-38-2091まで。

◇会員の動静

・たかとう匡子  
平成29年兵庫県功労者表彰・文化功労部門で受賞。  
5月17日に兵庫県公館で表彰式が行われた。  
・時里二郎

『現代詩手帖(思潮社)』の詩集月評が2017年1  
月号から始まる。安水稔和氏の後任として「神戸新聞  
文芸・詩」の選者に6月から就かれる。  
・玉川侑香

玉川侑香詩集『戦争を食らう』(風来社)で、第45  
回壺井繁治賞受賞。記念会は6月29日風月堂ホール  
で、「風のたよりのコンサート」が行われた。

◇退会・逝去

松尾茂夫(逝去)、山名才(逝去)、船津拓実、梓野陽子、  
藤原清志、志賀英夫(逝去)、竜崎富次郎、鈴木漢、  
青木恭子、富哲世(逝去)、直原弘道(逝去)

◇入会

・野村千代美 〒665-0031 神戸市垂水区清水が丘2  
-3-11-113  
電話078(785)0410 所属「風の音」

・山下輝代 〒665-0842 宝塚市川面3-8-6  
現代詩は安水稔和先生に師事(火曜日同人)を経て、  
現在は俳句結社「藍生」(主  
宰・黒田杏子)に所属し、俳  
句修業中。詩は朗読者として  
研鑽中。本業は音楽家・イベ  
ントプロデューサー。



◇イベント案内

現代詩セミナー⑤神戸2017

主催 現代詩セミナー⑤神戸実行委員会  
10月28日(土)13時〜17時30分  
神戸女子大学教育センター(神戸市中央区中山通り2  
の23の1)

―輝け女性詩 新しい戦慄を求めて―  
・講演会 倉田比羽子 ・シンポジウム  
・自作詩朗読会

連絡先 倉橋健一・今西富幸・神田さよ(事務局)  
電話0798(53)0686

★兵庫県現代詩協会事務局/神田さよ  
〒663-8006 西宮市段上町6-14-4

★会計/野口幸雄  
電話 0798(53)0686

★会報編集/大西隆志  
〒567-0846 神戸市灘区岩屋北町  
4-4-5-902

★印刷所/社会福祉法人 新生会 新生会作業所  
〒663-8006 西宮市染殿段町2の11

〒670-0061 姫路市西今宿3丁目1番9の702